森安理文著

永井荷風

ひかげの文学

国書刊行会

永井荷風　ひかげの文学

昭和五十六年十二月一日　印刷

昭和五十六年十二月十日　発行

定価　六、八〇〇円

著　者　森安理文

発行人　佐藤今朝夫

発行所　国書刊行会

東京都豊島区巣鴨三―五―十八　〒170

電話　九一七―八二八七　振替　東京五―六五二〇九

印刷所　セイユウ写真印刷　製本所　青木製本

目

次

第一章　永井荷風の文学
下町　11
異郷　19
歌枕　33
隠棲　40
土着　60
個　70

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第二章　作品論

すみだ川　——江戸は近代の中で造型される　83

狐　——反倫理の上の肉親の情　103

いちごの實　——ロマンの成立と造型にかかわる基本的な発想について　115

地獄の花　——無頼の外面について　123

監獄署の裏　——ダンディズムの偽態について　136

妾宅　——妾宅からの発言　147

新橋夜話　——美学と饒舌からの破綻について　165

夏すがた　——のぞき見の文学　176
おかめ笹　——索莫たる笑いについて　187
花火　——市隠の位置　204
あぢさゐ　——反近代としての語る文芸　214
つゆのあとさき——艶冶は至上の美徳である　222
墨東綺譚　——やつしの美学　235
浮沈　——沈んでゆくものは何か　259
踊子　——反伝統の舞台、浅草　275

勳　章　——哀愁とはユーモラスなものである　293
問はずがたり　——夢の夢について　300
渡鳥いつかへる——郷愁への説話　315
*
第三章　永井荷風と生活
作家にとって生活とは何か　325
*
あとがき　349

永井荷風——ひかげの文学

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

第一章　永井荷風の文学

下町

永井荷風は東京の生まれである。そして荷風の文学のほとんどは東京を舞台として描かれている。しかし興味深いことは、荷風の描いた舞台としての東京が、荷風を育てた山の手ではなく、山の手とはむしろ対照的な下町であったことである。この傾向は晩年に至って特に顕著となる。

東京における山の手界隈は、東京の西欧的な文化を象徴する界隈であって、関西の文化に拮抗して出来た新しい東京の知的文化帯である。下町がなお江戸の伝統的な情趣を残存していることに対し、山の手は東京の西欧化・近代化を急激に促進させる知的なエネルギー源として評価されている。こうした二つの文化の構造的な相違について、前者を庶民的であるとすれば、後者には多分にエリート的なものが目立ち、前者が地縁的な人情の世界を拡げることに対し、後者はともすれば孤立した知識人

を育てがちな風土といえるであろう。さらに江戸から東京へという歴史的な変遷に伴って東京の中心が下町から山の手に移行する過程は、東京が構造的にも大きく変質する意味を明らかにしている。すなわち東京が京都に変って、新しく政治、経済の中心となったことは当然だが、内側からみれば、明治政府を支えた薩長を中心とする地方勢力が、山の手を新しい根城として、東京に残存する江戸的な文化を次第に下町へ駆逐していくのである。

そういう意味からいえば、山の手文化とは、東京に新しく興った非江戸的な地方文化の変貌としてとらえることも可能であろう。そこに下町とよばれている文化に、たえず弱者として追われるもの、さらに滅びゆくものとしての哀感がただよってくるのも、ひとつのなりゆきであったといえよう。

荷風は、明治十二年十二月、東京の小石川区金富町に生まれた。その頃の小石川は、まだ狐でも出てくるような寂しい郊外であった。荷風は、当時を追憶して、『狐』に、

「祟りを恐れる神殿の周囲を見るやう、多でも夏でも眞黑に靜に立つて居る杉の茂りが一層其の邊を氣味わるくして」いるようだと述べ、さらに

「私は小學校へ行くほどの年齢になつても、傳通院の緣日で、覗機關の畫看板に見る皿屋敷のお菊殺し、乳母が讀んで居る不知火物語の繪草紙なぞに、古井戸ばかりか丁度其の傍にある朽ちかけた柳の老木が、深い自然の約束となつて、夢にまで私をおびえさせた事が幾度だか知れなかつた。恐いものは見たい。恐る〳〵訊く私が知識の若芽を乳母はいろ〳〵な迷信の鋏で切摘んだ。父親は云ふ事を

聽かないと家を追出して古井戸の柳へ縛りつけるぞと怒鳴られた。あゝ恐しい幼少の記念」となる。

そして、この『狐』は、「信田の森の白狐」の伝説をパロディ化して作られたものであることから推して、当時の小石川一帯には、かなり江戸的な情緒の残っていたことが察せられる。

父の永井久一郎は、尾州藩士永井匡威の長男で、明治早々にアメリカのプリンストン大学に学び、帰国後は文部省の高級官僚を経て、退官後は日本郵船の上海、横浜の支店長を歴任し、その間、来青という号で漢詩をも、ものするという文人でもあった。

また、母の恒は幕末の儒者として名高い鷲津毅堂の二女であるが、封建的な儒教の鼓吹者ではなく、熱烈なクリスチャンであり、当時としては最も進歩的な婦人であったといわれる。

また一族には、枢密顧問官や大使、大学教授、あるいは牧師として名を成したものもあって、荷風が幼時から身につけた知的な生活習慣は、山の手階級としては最も代表的な、典型的なものであったといえるであろう。中学を卒業した明治三十年、十九歳の荷風は父母や弟らと揃って上海に遊ぶなど、当時としては極めて優雅な生活を送っている。

こうした山の手階級の風土は、荷風の文学的出発だけでなく、生涯を通して彼の文学を支える強いエネルギーとなっているのである。

一般的に考えて、環境にそのまま素直に順応することで生長する作家もあるが、反対に環境に反逆し、それを生涯否定することの中に己れの文学的エネルギーを発見助長していく作家もあって、作家

と環境との関係は、正負いずれにも強い作用をもつものである。

荷風の場合は、その後者の最も鮮やかな範例といえよう。彼の青春は、彼を生育した環境のすべてに対する反逆から始まった。彼の為すことのすべては厳格な父と、それをとりまく道徳的な家風に対する裏切り行為であった。学業を放擲し、落語家の弟子になってみたり、また歌舞伎座の役者部屋に出入りしたり、ときには家人の目を盗んで吉原にも遊んだりした。これはエリート永井一家にとっては、まさしく顔をしかめざるを得ない放蕩息子の乱行というべきであろう。

こうした無頼な反逆行為に彼を走らせたものが、果たして何であったのか。それは一概にいえることではないが、ただ彼がその後「小説家」を志し、「小説家」として完成しようとした試みの中に、おのずから明らかになっていくはずである。永井家にとって、彼は確かに放蕩無頼な乱行者であった。だが彼の謀叛が、永井家という一個の家とか両親に対する反逆だけではなく、いわば、永井家に象徴される当時の支配階級に対しての、階級的な謀叛であることに、重要な意味があった。

そういう意味からいって、彼の大胆な反逆は、彼をして彼の所属する階級からの落伍者とするだけでなく、反対に、彼の所属する階級に対する最も鮮かな弾劾者となることであった。しかし、彼の弾劾が、階級的な謀叛でありながら、いわゆる社会的、経済的な階級闘争とならなかったのは、彼の弾劾すべきねらいが、明瞭に、支配階級のもっている指導者意識と、そして、それを内側から支えている極めて不可解な知性と称するものの実体に向けられていたからである。彼の弾劾の特徴がそこにあ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com